

第七章 わたしたちに必要な糧を今日与えてください

今日も朝早く、いつものように
こどもたちが、野犬と競っている、
生ごみバケツをあさる権利をめぐって。

両者は入り乱れ、
バケツから残飯を拾い上げる。

そして結局、犬とこどもは、
悪臭を放つ残飯を分かちあっている。

同族相食む世界、

そこには一片のあわれみもない、

神はどんなに答えを求められていることか、

わたしたちに必要な糧を今日与えてください！ という飢える者の祈りに。

今日——いや、毎週——

わたしたちのテーブルにのる糧は同じものではなかった。

それは、苦い糧であり、

その糧を神に乞い求めていた

貧しい人々のろいにみちていた。

こどもたちと野犬のような

飢えた者たちとそれを分けあつた時にだけ

糧はその良き味を取り戻す。

この嘆願は主の祈りの中の転回点をなしている。これ以前の部分は、天に向けて献げられている。すなわち父としての神聖なる神、超越した方（天にあって）であると同時に近くにあり

(わたしたちの父) 常に聖なるものとされねばならない方、その王国は来ており、われわれのあの歴史の中に作られていて、神の究極の意志がなしとげられること。その調子はおごそかであり、言葉づかいは韻律的である。ところがこの第二の部分では、われわれの目は転じて地上と人間、そして人間の必要とするものに向かつてゆく。具体的には、生命に必要な糧、交わりの崩壊に対する許し、誘惑に抵抗する力、悪からの救いが求められる。言葉は長く、その口調は人生で大きな比重を占めている苦悩や苦難に彩られている。前半では神の問題が扱われ、後半では人間の関心事が扱われる。主の祈りにはこの両者が含まれている。

後半の部分では、神の神秘性も靈性も登場しない。ここに据えられているのは、歴史的、下部構造的、生物学的、そして社会的な具体物として永久に脅威を受けている人間の生である。しかしここでは人間性にだけ関心が払われているのではなく、神もまた関わることになるのである。このことが祈りと嘆願の中味を作るのである。こうして、神に関わる縦の関心と、人間に関わる横の関心の間には何ら競合するものはない。両者は、祈りという虹の下で出会う。物質的なものと靈的なもの、人間性と神性のまぎれもない結合は受肉の神秘から発する力を組成する。神の国においては、物質的なものと靈的なもの、人間性と宇宙、創造主と被造物とが組み合うようになるのである。そこで、われわれは主の祈りにおいてその二つが一緒に出てくるとしても驚くにあたらない。ここでは最も崇高な存在が最も現実的な存在と出会っているの

ある。ごくありふれた、誰にも明らかな平凡な——パン——が、神の前に、そして人間の前に置かれている。主の祈りは、精神主義者を無視して、この真理を力強く断言している。⁽⁸¹⁾

「糧」(パン)——物質の聖なる側面

この祈願は「糧」(パン)に中心がある。われわれは、前後にある修飾の言葉(「わたしたち」「今日」又は「日毎」)を取り上げる前に、この単純明快な言葉を取り扱う必要がある。この「糧」(パン)ということばには、きわめて重要な意味が含まれている。すなわちここには、人間に関する現象を研究対象とする学問分野である人類学の観点から見て、重要な要素が盛り込まれているのである。この糧(パン)には、その物理的また化学的成り立ち以上の意味が含まれている。それは、人間の全ての糧、これなくしては何もできない糧、全てのシンボルなのである(箴二〇13、三〇8、詩一四六7、レビ二六5、コヘ九7、シラ三一23-24)。糧(パン)とは、まさに「命のパン」(ヨハ六35)にほかならない。

人間の命は物質、基本的物質と分かち難く結び合わさっている。精神がいかに飛翔しようとする神秘的な思索がいかに深まろうと、あるいはわれわれの抽象的思考が形而上学的にいかに高い

レベルにまで到達しようと、人間はやはり一片のパン、一杯の水に依存し続ける。一握りの物質に依存しているということである。基礎的な物質はどのように非常に重要なので、ついにはわれわれはこの物質こそがわれわれが思いをめぐらし、あるいは計画し、おこなう全ての事柄の基盤であり源であると気付くに至るのである。それは建物でいえば土台に相当するものである。この土台は、その上に敷き詰められる床や、さらにその上に配置される家具などと関連してくるだけでなく、そこに住む人間とも関わってくる。建物の土台は人間を存在させ、生存させる条件である。そこで、この土台は糧（パン）によって象徴される人間の食物に似ている。人間の生命はそれを頼りとし、そのあいまいな物質、その物質的な要素に依存しているのである。生命は確かに、パン以上のものであるが、パンを抜きにしては、いついかなる時も生きては行けないのである。

神学的な観点からいうなら、人間の基本的な必要物は非常に重要なので、神は救われる者と失なわれる者を、われわれが実行することもしないこともできる正義と思いやりの関心において結びつけるのである。ということは、最終的にわれわれは、人間の基本的な必要をめぐって定められた基準に従って、つまりわれわれが飢えた人、着る物を持たない人、渴きを訴える人、獄に捕われている人の世話をしたかどうか、その基準に従って、神の裁きを受けるということになる。われわれの永遠の運命は、そのように、究極的にはパンと水、衣類、それに他の

人びととの連帯、と切り離して考えるわけにはいかなのである（マタ二五31（46参照））。

したがってわれわれの胃は、重要さにおいて、心臓や頭脳と並ぶ存在と見ることが出来る。

それゆえ、いかなる祈りも、いかなる精神活動も、パンに取ってかわることはできない。あるいはそのパンを得るために、そしてそれを飢えた者の食卓に置くためにひんばんに行かねばならない重労働に取って代わることはできない。いかなる敬虔なことばも、空腹をかかえた人間の飢餓を鎮めることは出来ない。神はわれわれが労働に従事し、パンを得ることを望んでおられる。その労働には時間や、汗や涙が伴い、そして神からある程度離れることになる。なぜなら天上の物でなく、地上の必要物を得ることで手いっぱいだからである。しかし神がわれわれに望まれるのは、神の意志、神の名、神の国、神の事柄に關することだけではない。神はわれわれが、人間の事柄、人間の必要物、人間の飢え、保護や救済を絶望的に求めている人びとに關することを望んでいる。人間がこの地上にあるのは、神のためだけでなく、人間自身のためでもある。神はそのように望んでおられる。神に祈るということは、すべての事について祈ることなのであり、神の事と人間の事の両方についての祈りを父なる神に捧げることである。⁽⁸²⁾よく調べてみるなら、ここが主の祈りの転回点になっていることが見てとれる。「御名が崇められますように」「御国が来ますように」「御心が行われますように」という最初の三つの嘆願の部分において、われわれは神の事柄に關心を向けている。これに対して、その後の四つの

嘆願においては、神がわれわれの事柄に関心を向けるのである。「必要な糧」の求め、「負い目」の赦し、「試み」の排除、「悪しき者」からの救い。この二種類の次元は、決して分けられないものである。それゆえ主は、この主の祈りにおいて両者を備えられたのである。われわれはわれわれが必要とするものを決して恥じることはない。神は飢えについて配慮なさる。われわれの願いを聞き、飢えた口に食物を満たして下さる。これによってわれわれの命、すなわち神から受けた最も尊い贈物である生命が保たれるのである。

かくして物質は現実の聖なる手段となる。その意味において、物質もまた秘蹟的存在ミラクル的存在なのである。このことは、聖書の中にあるように、パンが歴史世界における神の国のシンボルである、そして偉大な祝宴を意味するものである、という確信を人が深めるに従って、いつそう鮮明となってくる。パンとは、永遠に続く生命を保証する永遠の食物のこの世における徴しなのである。パンはわれわれに完全なる生命を約束するが、それ以上に、それは、この世の飢えた旅人たちの行路のただ中に、まさに今、贈られるパンなのであり、人類の救いへの飢えを完全に満たすパン——すなわちイエスとイエスの王国そのものの、なのである。

こうしたすべてが、短く、ごく日常的で、気どりのない、単純な言葉である「パン」に含まれているのである。

「わたしたちの」に含まれた意味の重さ——幸福の秘密

パンを求める欲求は個人の問題である。しかしこの欲求を満足させるのは、個人の努力ではない。共同体の努力が必要となるのである。それゆえわれわれは、「わたしの父よ」と祈るのではなく、「わたしたちの父よ」と祈る。この部分のイエスの祈りには、実に奥深い真実が含まれている。確かに旧約聖書は個人の満足を容認している。「喜んであなたのパンを食べ、氣持よくあなたの酒を飲むがよい」(コヘ九七)と言ひ、「飢えた人にあなたのパンを裂き与え」なさい(イザ八七)と述べている。しかしわれわれはイエスによって、人間が同胞であるという⁽⁸³⁾ことを十分に理解し得たのである。われわれは、われわれすべてのものである「父なる神」を持つてゐる。なぜなら彼は、「わたしたちの父」だからである。われわれは皆、この「父」の子供たちなのであり、そこでわれわれは、みな、兄弟姉妹である。この兄弟姉妹を顧みず、おのれの飢えのみを一人満足させるのは、この交わりを破ることになる。人は、単に、空腹を癒すとか「とにかく」生命をつなぐということだけに関心をいだくのではない。食べることは、単に栄養の必要を満たすだけではない。それは、一つのコミュニケーションの行為であ

り、交流の儀式なのである。もし食事が他人の不幸や悲慘を目前にしておこなわれるなら、すなわちラザロたちが食卓の下にうずくまり、残り物のパンくずを待ち受けているのを目にして、する食事というのは楽しくなく、人間としてなすべき食事でもない。日々のパンは、人びとの生活に必要な、基本的幸せを提供してくれる。もしそこに何らかの幸せがあるというなら、その幸せをほかの人々に伝え、分け合わなければならぬ。それがパンの本来の姿というものである。みんなに分け与えられ、交わりの絆を支えるものとなつてはじめて、パンは人間のパンとなる。そのときこそ幸せが見い出され、人間の渇きも満たされるのである。

われわれが日々食べ尽くすパンの背後には、われわれ自身が思い起こさねばならない巨大な人間の関係性という網状組織の全体が隠されている。一片のパンが食卓にのぼるまでには、沢山の人びとの労働が関与している。まず、麦の種子が大地に蒔かれる。この種子が成育していくには、世話が不可欠である。実りの時が来れば、また人手をかけ、あるいは機械を投入して、収穫の作業がおこなわれる。麦の貯蔵にも、パンの製造にも、他に多くの手が関与する。それから配送の時にも多数の手が要る。これら全ての中に人間性の偉大さと悲慘を見出すのである。搾取を含んだ関係もある。われわれが平穩に食べるパンのどれにも涙がしみ込んでいるのであるが、しかし、われわれはそこに交わりと分かち合いを感じることもできる。日毎のパンは人間の全世界をその光と闇において含んでいる。

共同して作られたこのパンは、分配され共同で食されなければならない。その時にのみ、われわれは心からわたいたちの日々の糧を願い求めることができる。神はわたいのパンのみを求める祈りには耳をお貸しにはならない。神との間に真実のつながりを結ぶには、ほかの人びととの間の結びつきを維持する必要がある。われわれが自分自身が必要とすることを神に願ひ出る時、神はわれわれに、われわれの同胞、兄弟姉妹の求めをそこに含めるようにと望まれる。さもなければ、われわれの交わりの絆はばらばらに裂かれ、人々は自分だけで生きなければならぬことになる。われわれ全てが同じ基本的必要物を分かち合い、その結果誰もが満足を得る時、われわれは兄弟姉妹となるのである。

われわれの口にするパンが、もし搾取の結果であるとするなら、それは神の祝福を受けたパンではない。そのパンは栄養という化学的必要を満たす存在であつても、人間の生命を養うことには失敗している。人間の生命は、正義と友愛の枠の中で生きている時にのみ、眞の生命となる。不正なパンというのは、実はわれわれのパンではない。それは盗まれたものであり、持ち主がほかにあるパンである。中世の偉大な神秘家マイスター・エックハルトは、いみじくも次のように述べている。「ほかの人間に属するパンを人に分け与えない者は、自分自身のパンを食べているわけではない。自分のパンと、ほかの人のパンと両方を食べているのである」と。⁽⁸⁴⁾

都市に住む無数の飢えた人、空腹をかかえた世界の数えきれない人びとは、われわれの食べるパンの質について、問いをつきつける。そのパンは非常に多くのこどもたちの涙を含むゆえに、苦くはないか？ 余りに多くの空腹の苦痛をかかえ込んでゐるゆえに、堅くはないか？ と。そうしたパンは、わたしたちのパンと称される資格はない。そうしたパンがわたしたちのパンになるためには、そのとき、われわれはこの世界を変革しなければならない。そしてほかの人の口に入るべきパンを富める者が横取りすることを許す構造をもつこの社会を救済しなければならぬ。

パンはわれわれに、集団的回心を迫っている。この回心は、われわれの祈りが空疎で偽善的なものであつてはならないなら、実現されなければならない。聖書は私に、私の知る多くの人びとの必要物を無視して、自分一人のためだけに願ひ、求めることを禁じてゐる。わたしたちのパンだけが、神のパンなのである。

「今日の」——毎日のための、そして永遠のためのパン

「わたしたちの」パンという概念には、「今日の」「毎日の」あるいは「明日のための」といっ

た非常に重要な修飾語がつけられる。ギリシヤ語では *epiousios* が用いられている⁽⁸⁵⁾。この語の正確な意味は専門家にとって問題となっている。というのも、すでにオリゲネスが「わたしたちの父」に關しての注釈で指摘しているように、このことばは、どのギリシヤ語テキストにも登場しないからであり（唯一の例外は、上エジプトから出土したハワラ・パピルスであり⁽⁸⁷⁾、紀元五世紀頃作成されたものと推定されている）、したがって、このことばは、福音書記者たちによって造語されたと思われる。それゆえにわれわれが頼りとするのは、言語学上の分析だけである。この分析によると、次の三種の解釈がある。

第一の解釈は、*epiousios* は *epi*「〜の上」、*ousios* は「〜を通じて」など）*-einai*（動詞 *to be*「ある」「存在する」より）から生じているとする説で、*ousios* は、形容詞である。そこで全体の意味は「今あるこの日のためのパン、日々のパン、毎日与えられるパン」となる。最も古いラテン語の訳（イターラ）は、この説を採用している。ここではこの意味のほかに「生存のために必要な、生きる上で欠くことのできない」パン（*epi ousia*）のようにも読める。

われわれが基本的に必要とする糧は、日々のパンであり、われわれは通例はこのパンを求めて祈りを捧げる。ウルガタ（ラテン語訳聖書）で聖ヒエロニムスは、マタイによる福音書におけるこの嘆願部分を *panis supersubstantialis*（逐語訳で、*epi* とは *super*「超〜」*ousios* とは *substantialis*「物質」「つまり超物質的なパン」と訳し、ルカによる福音書の部分では *panis*

quotidianus「毎日のパン」と訳している。

第二の解釈は、epiousiosを、epi+ienai(「来る」あるいは「到着する」の意)から派生したことばと見る解釈である。これによると、全体の意味は「わたしたちの明日のパン、来るべき日のためのパン、わたしたちの将来のパン」となる。マタイによる福音書の説明で、聖ヒエロニムスは、次のように述べている。ヘブル人福音書(外典であるユダヤ的福音書)では、epiousios(超物質的)は machar というヘブライ語に訳されていて、これは「明日」つまり未来を意味すると。⁽⁸⁸⁾この読み方を採用すると、「わたしたちに今日(あるいは「毎日」)明日のためのパン(糧)を与えてください」となる。

第三の解釈は最新の研究にもとづくもので、epiousios のような複合語の場合、その多くは接頭辞にさしたる意味がなく、「無意味な」接頭辞である、という発見からなされている。⁽⁸⁹⁾この種のことは、あらゆる言語に見出すことができる。たとえば英語ではわれわれはロープあるいは靴のひもを loosening「ゆるめる、ほぐく」と言い、またはそれらを unloosening「ゆるめる、ほぐく」とも言う。un という接頭辞は、通常の場合、語根の単語を否定したり、その反対の意味を示すのであるが、この二つの単語は同じ意味である。フランス語にもそのような単語がある。partir(離れる)と départ(出発) chercher(調査する)と recherche(調査)といった例である。接頭辞である départ の de と recherche の re は、いずれもそれぞれの

元の意味に何も付け加えない。ギリシャ語には *ousios* (に *an, en, omoi, hyper* 他の接頭辞を伴って) で作られた複合形容詞が一二あるが、みな名詞の *ousia* をその語根(「物質」「物質」を意味する)に持っている。

さて、われわれが問題としている *epi* と *ousios* の組み合わせであるが、接頭辞 *epi* は、聖ヒエロニムスが訳したように *super* (超) と訳されるべきではない。なぜなら *epi* には *concerning* (〜に関する) あるいは *belonging to* (〜に属する) の概念が持ち込まれているからである。こうして *epiousios* は「本質にかかわる物・本質的存在・実質的なもの」という意味になる。しかしこうした意味なら、すでに *ousios* が持つており、接頭辞は何の関わりも持たないのと同じことになる。せいぜい、強調する機能、原語の意味を強めるくらいである。しかし元の意味には何も加わっていない。接頭辞 *epi* を持つギリシャ語の単語は色々あるが、語根を豊かにすることはない。(たとえば *epinephes* 「曇り」、*epidiorpios* 「シチューに関する」、*epikephaios* 「頭に関する」)。 *epiousios* も同じ型の複合語と思われているのである。つまり *epi* には、特別の意味はないということである。この解釈に従うと、祈りのこの部分は「必要不可欠なパン、実質的なパン、生命のために必要なパン」といった意味を持つことになる。しかし生命のために必要な物は、われわれの日々体験するものである。そこで、この第三の解釈は第一の解釈に近いことができる。

さて、これらの解釈のうち、いずれが最も的に近いであろうか？ 「明日のパン」なのであ

ろうか？ あるいは「今日のパン」なのであろうか？ 可能性としては、いずれにも解釈する

ことができる。どちらかに決める前にもつと言語学的な理由が必要である。聖書の釈義学者あるいは神学者であれば、歴史上のイエスの存在とイエスのメッセージに関するこれらの見解に最もあてはまる意味を取るであろう。そこでナザレのイエスを終末論の枠内で解釈しようとする人々は第二の解釈を選び、この部分を「将来のパンを今日わたしたちに与えてください」と読んでいる⁽⁹⁰⁾。他の人々は、イエスならびにイエスのメッセージを、非終末論的視野から理解し、（すなわちイエスは歴史がすぐに終末になり、王国がすぐに招来されると期待していなかったと解する神学者たちは）epiphaniesを、今日この日のためのパン（わたしたちが毎日必要とするパン）、地上を旅するわれら巡礼者のために必要な実質的なパン（第一と第三の解釈）と解釈するであろう。

主の祈りにおけるこの問題は、歴史的な批判や、歴史的イエスに対する論及という手段では正しく解決することはできない。主の祈りは、当時のキリスト者共同体の最も重要な祈りであった。当時の人びとにとって「エスカトン」（終末）は未知の未来に位置づけられていた。これに對して、現在の状況からするなら、すなわち歴史は日々形成されつつあるとする現代世界の思考の上に立つと、主の祈りは、今日祈られなければならないものとなる。その言葉は「教

会共同体」の意味をまとしており、歴史上のイエスと共にあった元の意味とは異なっているであろう。別な言い方をするなら、イエス自身が与えた当初の意味に、別の要素が加えられた。すなわち原始共同体、つまりすでに教会組織を形成したかつての共同体が何らかのものを付け加え、結局、われわれも現実の状況において何かを加えつつ、今日見るような意味を持つに至ったと考えることができる。すなわちこうした過程において登場するそれぞれの意味はどれも間違いいはいえないわけである。最も古い意味こそ唯一正しいものであるとする必要はない。それは源泉に似ており、他の解釈を生み出し、それら全てが祈りの生活に意味を加えるのである。

われわれは、epiousios が原初においてどんな意味をもっていたのか、すなわちそれは、「将来のパン」を意味したのか、あるいは「日々のパン」か、それとも「必要不可欠のパン」かと、この三つをめぐって複雑な議論を展開したわけである。この三つの意味はそれぞれが他を前提とし、相互に組み合わさっている。こうした解釈はすべて、「私たちの日々のパン」という同一の表現のこだまなのである。

わたしの感じることを述べるとするなら、歴史上のイエスによって示された意味は、「将来のパン」「明日のためのパン」であっただろうと思う。この感触は一つの確信にもとづいて、すなわちそのすべてをここにおいて説明するのは不可能なのであるが、歴史上のイエスは、然

示的・終末論的立場に立つて思索し、行動したという思いにもとづいて、感得されたものである。⁽⁹⁾ イエスは、神の王国がやがて出現するとの期待を抱きながら生きたが、その開始の「時」について明確に述べているわけではない。

しかしイエスの宣言の中核、山上の垂訓、かれの要求する事柄の根源的な性格——すべてがこの解釈に高度の可能性を増し加えている。こうした解釈に一致して、福音書も繰り返し、神の国が祝宴に匹敵すると証言している。真に「本質的な」パンは、天の食卓において供されるのである。食べ物(パン)を求めるわれわれの願いは、この天上の宴会と深い関係を持つている。かくしてルカによる福音書一四章一五節には「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」ということばが見える。また、同書六章二一節にも全く同じ終末論的な記述がみられる。「今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる」と。イエスは他の場面でも、「あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし」(ルカ二二30)と語り、「東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く」(マタ八11)と述べている。ヨハネの黙示録も、天の国とは心正しい人がもはや飢えや渇きを感じない所と記している(黙七16)。父の永遠の王国で供されるこの未来のパンこそ、「わたしたちに今、このパンを与えてください」という私たちの嘆願の対象なのである。言いかえるなら、次のよう

なこととなろう。「御国がすぐにも来ますように！ 主よ、一刻もはやく解放のための調停をおこなってください。わたしたちを、真に本質的な食べ物（パン）が供される宴席へ、永遠の生命を保証する糧の差し出される宴席へ、どうかいざなってください！」。

この終末論的な解釈に対して、旧約聖書の記述が確かな基盤を与えてくれる。まず、マナについて、出エジプト記が次のように述べている。「わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出ていって、毎日必要な分だけ集める」（出164）と。詩編にも「かれらの上にマナを降らせ、食べさせてくださった。神は天からの穀物をお与えになり……」（詩七八24）とある。さらにイエスご自身もこの旧約聖書の原文に触れ、次のように教えている。「モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる」（ヨハ632）と。

この解釈、すなわち「明日の（将来の）パンを今日わたしたちに与えてください」とする解釈は、イエスの終末論的心情の枠組とうまく合致するように見える。しかし注意深く心にとどめなければならぬことがある。この「未来」の意味するところ、すなわち神の国における終末論的な意味でのパンは、具体的、歴史の上のパン、その物質性に根ざした存在であるという。実在するいかなるシンボルも（この場合は「天上のパン」）、その具体的実在（地上のパン）を抜きにして存在することはない。いかなるシンボルもそれ自身でシンボルになること

は出来ない。つねにそのシンボルが作られる土台となつてゐる何らかの関連物があるのである。換言すれば、天のパン（未来のパン）を求めるためには、同時に、われわれの肉体のための物質としてのパンを求めなければならない。そうでなければ、神の国に存在する真に本質的なパンが何を意味するものであるかが理解できないであろう。シンボルを、それを支える現実のものから引き離すなら、シンボルは消滅するしかないであろう。現実のパン、地上のパンを取り去つた天上のパンは、無意味で理解不能の存在と化すしかない。それはすでに「シンボル」でも何でもないものである。しかしこれによつて、われわれが先に論じたこと、すなわちわれわれの生命を養うパンが天から地に下されるという事実、父の王国における永遠の生命を保証するパンがわれわれに約束されているという事実をいささかも撤回しているわけではない。

イエスによる非終末論的色彩の濃い考え方によれば、epiousios は、「日々のパン」「日ごと必要とされるパン」と解釈した方がいっそう理にかなう。この解釈は、歴史の辺縁、片隅で生きた人びと、すなわち静かな自己放棄により、ひたすら神意に従うというイエスの求める理想の生き方を選んだキリスト教共同体が辿りついた意味であつた。⁽⁹²⁾主は弟子たちに「明日のこゝまで思い悩むな」（マタ六34）とさとし、何を食べるか、何を着るかについても思い悩むな（同六25）と教えてゐる。また弟子たちを伝道の旅に送り出すにあたつても、「パンも、袋も、

また帯の中に金も持たず」(マコ六八)に行けと命じられた。福音の理想は貧しさの中に生き、神のみ旨の奉仕にわが身を捧げるということである。必要なものは神が備えられる。これは根源的な理想である。歴史をさかのぼれば、この主のことばを真剣に受けとめ、このように生きた魂の持ち主はつねに存在したのである。

主の祈りの中のこの部分によって嘆願されているのは、日ごとに必要とされる「パン」である。旧約聖書にすらくこう書いてある。「貧しくもせず、金持ちにもせず、わたしのために定められたパンでわたしを養ってください」(箴三〇八、またシラ四〇29参照)。ここで人は神に對して、富を、あるいは快適な生活を、便利さを願ってはいない。しかし旧約聖書はまた、必要なものにも事欠く貧窮状態をほめもしない。旧約聖書が求めていることは嘆願者が、今日を生きるために必要なものだけである。基本的に必要な物がここに描かれている。ここで「パン」は單純に食物をあらわしているのだが、聖書の中でこのことばが用いられる時はつねに、「衣服」(申一〇18)とも、「水」(同九9)とも、「ぶどう酒」(コヘ九7)とも、そして「油」(詩一〇四15)とも結びつけられる。イエスはどのような強欲も、また不要な蓄えも拒否するのである。

肉体の生命に必要なこの日ごとのパンは、別の意味を含むものとしても与えられるのであるが、初期キリスト教社会においても、考えられていたことだろうと思われる。精神の生活や人

間の宗教的次元に必要な「パン」とは何であろうか？ イエスは「命のパン」(ヨハ六35)として現われる。「これは、天から降^{くだ}ってきたパンであり、これを食べる者は死なない」(同六50)。「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(同六51)。パンが、まさしくイエスであることはない。しかし、この日々のパンを食べながら人々は、キリスト教共同体が日々食べている別のパンである「聖体」に連なっている。「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである」(ヨハ六51)。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。……このパンを食べる者は、永遠に生きる」(同六54、58)。

以上の多様な意味は、信ずる者が、「わたしたちに必要な糧を今日与えてください」と祈るとき、共鳴し合ってその意味を豊かにする。第一に求められなければならないのは、それなくしては生命が維持されない、物質としてのパンである。このパンは、永遠の命、幸せな命を保証する神の国のパンを指し示す。そしてこの王国のパンはすでに予言され、待たれていた。つまりそれは、その生涯とメッセージにおけるイエス自身なのである。イエスは聖体拝領の際のパンの形で歴史の中に生き続け、われわれはそのパンを、神の国の、またイエス自身がすでにその大要をたどった救済の予期された初穂として、拝領する。歴史上のイエス、初期キリスト教共同体、そして、われわれ自身は、今日の世界の中で物質的、精神的必要の全てをこめて

「わたしたちの日々のパン」というこの簡潔な重い言葉を見出ししているのである。

「今日与えてください」——人間の労働と神の摂理

聖書には、パン、すなわち食べ物を与えるのは神であるとの確信を述べた記述が満ちている。わたしたちを養うものはすべて神からの贈物である。われわれは、その贈物を与える神に感謝を捧げなければならない。信心深いユダヤ人が唱える食卓の祈りは、次のようなことばで始められる。「わたしたちの主、宇宙の王、全世界を、良き物で養う神に感謝を捧げます。恵みと愛と慈しみをもって、主はあらゆる生き物にパンを与えてくださいます。どうかあなたのお恵みが永遠に続きますように……」。日々の食べ物に感謝するすべを知らないのは、不信仰な者、無神論者だけであろう。この文脈の中において、われわれは、「わたしたちに、与えてください」という願いを理解する必要がある。

しかし、われわれの必要とするパンを神に願うとは、具体的には何を意味するのであるか？ パンを食卓にもたらすのは人の労働ではないのであろうか？ イエスは労働の重要性を認めている。パウロはこのことを極めて端的に、次のように述べている。「働きたくない者は、

食べてはならない」(二テサ三10)。しかし人間の労働のすべてがパンに結びつくわけではない。われわれはあらかじめ決められた条件や環境に依拠しながら生きている。そのことに気づく時、誰もが己れの無力を感じ、神の主旨のうちにありと感ずるのである。われわれに恵まれた天候と雨を与えてくださるのも神なら、労働に耐えうる力をさずけてくださるのも神である。植物の種子が芽を吹き、成長するのも、神の力があればこそである。神は、あらゆる創造の主である。われわれ人間は、労働によって、この創造にいささか手を加えることはできるかもしれないが、創造することは出来ない。パンの一片一片には、人間の手よりも神の手のほうが深く関わっている。したがって、信じる者が天の父に向けてパンを願うのはきわめて正当なことである。

さらに、パンを求めるこの嘆願は、われわれのこの時代において、きわめて具体的な意味を持つ願いとなっている。何百万もの人々が、わずかな食べ物求めて生ごみの山をあさっている。何十万もの人びとが毎年、十分なパンがないために死んでいく。栄養失調と飢餓の亡霊が人類全体をますます脅かすようになった。空腹をかかえたこの何百万の人びとにとって、パンを求める願いは、じかのさし迫った意味をもつ折りなのである。飢えを満たされている人びとには、「飢えた人にあなたのパンを裂き与え」なさい(イザ五八7)という神自身の警告が思い起こされるべきである。これにくらべれば、四世紀の聖パシリウスの言葉も、なんとなまぬ

るいことか。

あなたの方の家で腐っているパンは、飢えた人びとのパンである。あなたのベッドの下で白かびを生やした靴は、はだしで歩く人の靴である。大カバンに死蔵された衣服は、はだかを余儀なくされている人のものであり、金庫にしまい込まれ、使われない金は、貧しい人びとのものである！

マタイによる福音書に記された主の祈りでは、わたしたちの糧を「今日」(semeron)願ひ求め、ルカによる福音書では「毎日」(kat'emeran)と願ひ求めている。両方とも妥当な表現である。⁽⁹³⁾前者の嘆願は、さし迫った意味がある。つまり、今、必要とされるパンを願ひ求めている。後者の場合には、信仰の持続を意図しており、今日、また毎日必要とされるパンを求め、己れを神のはからいに委ねるのである。

パンの神聖さ

パンが神聖な実体を表わしているということは人間の意識に深く根ざしたものである。パンは尊敬と崇拜の念をもって取り扱われる。非神聖化された社会だけが異なった行動をとる。というのもこうした社会の人間は、人類や世界にとって何が神聖であり、何が崇高であるのか、その点についての座標軸を失なってしまったからである。パンがなぜ神聖であるかという点、それは決して侵してはならない生命の神秘と深いつながりを持っているからである。

旧約聖書時代の人びとにとって、パンは愛と恵みの根源的なしるしの一つであった。その愛と恩恵をもって、神は人を支え、人をとり囲んだのであった。パンは神が飢餓や死という悪魔を追い払うために用いたものだだったのである。その上、キリスト者にとって、パンは神聖以上なものださえる。なぜなら、未来の王国で全ての義人たちが、神と共に盛大な宴会において最後に再会するのだが、パンはその宴会を象徴しているからである。そしてこのパンはまた、命のパンであるイエス、われわれを永遠の命へと請け戻してくださったイエスという意味深長な象徴でもある。日々のパンが神聖であるいまひとつの理由として、これが全質変化すると、

巡礼者のパンである聖体を構成する物質となる、という点を挙げることができる。このパンによって人は復活して永遠の幸せを体験出来るように養われるのである。

この「パン」ということばに、明確な定義を与えづらい *enousios* なる語が付加されてきた。このことばには「超物質的な」「日々の」「必要な」「未来の」「不可欠な」などの意味がある。この言葉は、ほかのギリシャ語の文献では見当らない。オリゲネスが指摘するように、どうやら福音書記者たちの手で造り出されたものようである。多分現実のパン、何の変哲もないパンに隠された不思議な豊饒さほうじょうさの全てを表現するためにこの言葉が造り出されたのである。今まで見てきた様々な意味が全て、日々主の祈りを唱える人の魂の中で、理解され、もちこたえられ、響き合っていないなければならない。